
グリード（仮）

ブライダルベール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリード（仮）

【Nコード】

N4419Z

【作者名】

ブライダルベール

【あらすじ】

自他ともに認める異常者・欠損者の主人公が死んでしまった。しかし、神を名乗る御爺さんのおかげで、彼の念願が叶うかも知れない。はたして、彼はどのような道を歩むのか・・・人中から人外へ、人外から神外へ!!!

初投稿・更新不定期・誤字脱字に寛容な方で少しでも興味を持っていただけたら是非目を通して下さい。あと、色々な元ネタを出す

予定ですが、章ごとに読んでも基本解るように書くのでよければ目を通して下さい。(今のところ恋姫だけです)

暗闇と夢（前書き）

初投稿です。最後まで書けるか分かりませんが、温かい目で見守ってくださーい。

暗闇と夢

此処は何処だ。

光の一切が無い暗い暗い空間。

上下左右の無い空間。

．．．．．

．．．

．．．．．ああ

また、あの夢か。

今度はどんな夢になるんだろうか。

今の私ならどんな状況だろうと楽しめるだろう。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．おかしい？

何も起きないのは、おかしい。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

退屈だから何か考えてみるか。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．という事は、やはり世界という物は認識によって．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．いやしかし、その考えにいくためには基盤とな．．．．．

．．．．．

いゝや、覗き趣味の方が極めると思考まで覗けるようになるという事は、実に驚きましたね。

「いやいや、違うからの、それにしても、おぬし変わっておるの。」

「よく言われます。けど、私は、変人じゃ無いですよ。でも、常人でも無いですね残念ながら。私は、ただのしがない異常者です。もしくは、ただのしがない欠損者ですね。」

「いや確かに常人や言い方はおかしくなるが、並みの異常者や欠損者なら直ぐに己の存在を認識できなくなり輪に戻るんじやが。如何なっておるんじや。」

「うゝん。私が並みではない、という事じゃないですか。それで説明できますしね。」

「ただし……」

「ただし何じや。」

「ただし、貴方の“言った事が正しければ”、ですけどね。」

「つな!? おぬし儂の言う事が信用出来んのか。儂の事を誰だと思っっておる!?!」

「つえ!?!」

「変な御爺さんもしくは、更年期障害末期の御爺さんじゃないんですか!?!」

「違つわ!?!?!?!?!」

「じゃあ誰なんですか?」

「ふむ自己紹介がまだだったかのう。」
「はい。」

「儂は、神じや。」

神と3つの願

は？

「何じゃ、聞こえんかったか。ならもう一度、儂は神じゃ。」
えっと？

お疲れ様です？

「信じておらんな？」

そんな事無いですよ。そうですね、貴方は神様（自称）です。きつとこれから良い事沢山ありますよ。そうだ！！私囲碁・将棋・チェスが出来るんですけど、打ちますか。あ！そうそう知り合いが良い温泉知ってるらしいんですけど、行きませんか？そうだそうだ！！神様（自称）がいつぱい居る所知ってるんです、紹介しますよ。いや、きつと他の神様（自称）たちも喜びますよ。」
「おぬし、いい加減にせんか！！！」

？

何かしましたか？

「・・・おぬし、何者じゃ？」

はい？

「何とも無いのか？」

何ともの何も、何とも無いですが？それが何か？

「まあ、いいとしようか。」

??何がですか？

「気にするでない。」

分かりました。所で私に何か用ですか？

「そうじゃった、そうじゃった。おぬし、自身がどのような状態か解っておるか？」

うん？少し待ってください。

「うむ、かまわんぞ。」

.....

.....

ああ、私死んでますね。そっか、残念ですね。

「.....それだけかろう？」

いや、柄じゃない事はする物じゃないですね。つま、自己満足は出来ましたし良しとしますか。そうそう、先程は疑ってしまっすいませんでした。

「.....うむ、おぬし壊れておるな。」
「そうですね。」

「まあ、よい。本題に入がよいか？」

「かまいませんよ。」

「おぬし、何か望みは無いかろう。」
「望み？」

「そうじゃ、3つ叶えてやる。」

「対価に私は何をすれば？」

「話が早いろう。そうじゃのう。異世界にとんでももらう事と、偶に儂がする頼みごとを聞いてくれればよい。どうじゃ？」

「いいですよ。というか、私にはyesしか、選択権ないですよね。」

「頭も切れるようじゃな。では、望みを3つ申してみるがよい。」

「そうですね。その前に良いですか？」

「なんじゃ？」

「願というのは、異世界にとんだ際役立つ能力とかでもいいんですか？」

「うむ、かまわんぞ。さて、望みを申してみよ。」

「そうだな。」

「一つ目は、万物の生成と付与の能力とかはどうですか？」

「一つの願としては、駄目じゃな。」

「では、ある程度条件等を縛れば一つの願として扱うのは可能ですか？」

「うむ、可能じゃ。」

「じゃあ、血液に能力の付与とかはどうですか？」

「可能じゃ。」

二つ目は、世界を渡る能力は絶対に欲しいんですが。

「理由を聞いてもいいかのう。」

いいですよ。理由は、私の生きて居た時の座右の銘が 全てを知り
全てを楽しめ だからです。

「おぬし・・・いやなんでも無い。」
可能ですか。

「ギリギリ可能じゃ。じゃが、儂が良いと思うまでは異世界には渡
れぬし、行先はおぬしには決めれないがよいか？」

かまいませんよ。

「うむ、なら承った。」

ありがとうございます。

三つ目は、私の母・一番上の姉と二番目の姉と姪と甥の人生に幸多
からんことを願います。

「ほほほほ。」

何かおかしいですか？

「いや、何、少し意外だな。」

私が異常でも欠陥品でも感謝はしますよ。

「ほほほ、悪かたの。あい、解った。では、行ってもらえるかのう。」

「

ありがとうございます。

では、私は何時でも行けます。

「ではのう。」

はい。

「そうそう。」

何です。

「おぬしが、助けた子は無事じゃ。」

・・・そうですか。

無謀と能力（前書き）

これから、たまにアンケート的な物取るかも知れないので、その時は協力してください。

無謀と能力

「……う……ん……」
目を擦りながら、彼は目を覚ました。

「……」
暫く呆然としながら、彼は辺りの状況を把握しようと辺りを見回す。
「……森？」

そう、見渡す限り木々であるから、森意外に表現が出来ないのは、彼の表現能力が乏しい事とは関係なく、彼の周りは正しく森だったためだ。

「これから如何しようかな？」
彼は、これからの事を考える。

（とりあえず、えつと……イメージしよう、能力の付与。まずは、どんな危機からも生き残れる様に。皮膚が誰か他人に裂けられた瞬間に血液が高硬度高質化する様に……イ……メ……ジ……
……うぐ……ぎ）

その瞬間異変が起きた！！

（か……ら……だ……が……動か……ない……）

・
・
・
・

(・・・成功したみたいだ。良かった。でも、複数同時に付与を行うと体が持たないな。けどその心配ももういらなないけどね。)
付与に成功したことに安どし、一息つくことにした。

「・・・一息つくにもお茶も何も無いな。・・・町でも探
すか。」

そう言っつて彼は、森を歩き始めた。

・
・
・

「きゃー!!!!!!」

何処からか悲鳴が彼の耳に届いた。

「・・・情報が有れば、選択肢が広がるかな？」

彼は、この世界の事を聞くために声のした方向に歩み始めた。

少し離れた場所に、小さな崖の様なものがあった。そして彼が辺り
を見渡すと外套を被った子供が一人倒れて居た。

「よりによつて、子供かよ。・・・おい。生きているか？」

「・・・うう。」

子供は生きていたようだ。

「意識は・・・無し。外傷は・・・左足骨折・・・擦り傷多数

打撲多数・・・どうしようか・・・まあ、助けるか・・・
つー!!!」

彼は、子供の外傷を一通り調べ上げてから親指の皮膚を噛み千切つた。

(イ・・・メー・・・ジ)

そして、彼は、子供の口に一滴自身の血を飲ませた。

「よいつしよつとー!!!」

彼は、子供を抱き抱えて休める場所を得る為に、町を探しにでた。

・
・
・
・
・
・
・

「……何!? ……それは……本当か? ……解
った……」

何所か古びれた神殿の様な場所。

しかし、何所か近代的な外見を持つ物もある、矛盾をはらんだ室内
で老人はひとり呟く。

「……これは、厄介な事をしてしまったのかもしれんの。……
早々に手を打った方がよいのか? ……」

老人はそう呟きながら立ち上がった。

だが、立ち上がったと思つた老人の姿は其処には無く、沈黙だけが
室内存在していた。

彼と狂気の一端

時がたち、辺りも暗くなってきた最中。
彼はまだ、森にいた。

(困ったな、何処にも町らしきものが無い)
彼は子供を抱き抱えた状態でもう長い事歩いていた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・ところで、何か御用ですか？」

彼は、唐突に誰も居ない場所に話しかけた。

「気付いてんなら話があえ。身ぐるみとその餓鬼置いて、怪我しないうちにとつとと失せな。」

しかし、木蔭から柄の悪い男が威圧しながら出てきた。

「はい。解りました。少し待ってください。」

そう言いながら彼は木に子供を齎せながら優しく座らせる。

「話の早い奴は好きだぜ、でも、さつさとしな、俺は気が長くないんだ。」

柄の悪い男は下劣な笑みを浮かべながら彼を急かす。

い音が響く。

しかし、彼の蹴りは男の左腕を折ってなを、勢いを殺さずに蹴り抜く。そのため男の左腕から赤黒く染まった骨が露出し、男は痛みに耐え切れずに悲鳴を上げる。

「痛てー！！た、た、助けてくれ！！見逃してくれ！！」

男は見つとも無く腰を抜かしながら、彼から距離を取ろうとする。

「え？嫌だけど？」

彼は気にもせずに、おとこに詰め寄る。

「ひっ！！！！・・・」

「あらら、気を失っちゃた。如何しようかな。」

彼は、気絶した男を見ながら如何しようか思案する。

彼と贈り物

彼は困っていた。

目の前で気絶した男をこれから、如何するかを。

・
・
・
・
・
・

(無理やりにも起こして、近くに村が無いか聞こうかな。その後
でまた考えればいいよね?)

彼がそんな風に結論を出した時、頭に直接声がしてきた。

《おぬし、少しいいかのう?》

(いいですよ。御爺さん何か用ですか?)

《いやなに、おぬしにプレゼントをな。》

(.....)

《何じゃ、嬉しくないのかのう?》

(.....何を私はすればいいんですか?)

《うむ、いや、特に何をする事は今のところ無いぞい。》

(では何故?)

《おぬしに与えた能力で直接戦うと何かと目立つからの。だから、おぬしのために武器を用意しておいた。ベースになっておるのはダインスレイフじゃ知っておるか?》

(確か、北欧神話に出てくる魔剣で・・・なるほど、おおかた私の血液をその剣の媒体にして情報収集でもするつもりですね。)

《・・・考えが飛躍しすぎじゃ。使い方はおぬしの血を一滴吸わせてやれば解るからの。それと、名前は如何するんじゃ?》

(名前?)

《おぬしの名前と、この剣の名前じゃ。ちなみに、おぬしの居る辺りの名前は中国系の名で、さらに“真名”と呼ばれる神聖な名があるんじゃ。》

(じゃあ、御爺さんが真名と武器の名前付けてくださいよ。)

《それだけで良いのかの?》

(碎けた話、名前なんて基本興味無いですし。真名と武器だけで良いですよ。他のは、偽名使いますから。)

《うむ、解った。ならば、おぬしの真名を“真”、武器の名を“赤蓮”でどうじゃ?》

(解りました。何処で受け取れば?)

《・・・感想なしなんじゃな。武器は、ほれ。》

ドス

彼の右側に何故か鞘に入ったままで“日本刀”が地面に刺さっている。

(何故に、日本刀?)

《気分じゃ。》

(まあ、ありがとうございます。)

《達者でどうぞ。》

・
・
・
・
・

しばらくたち、彼は右側にある。日本刀を地面から抜き出し鞘から
刀身を抜き、自身の血を一滴垂らした。

その瞬間、彼の頭に様々な情報が入って来た。

「これは、使えるな。」

そう呟き、彼は気絶している男に、斬り先を少し当てほんの少しだ
け出血させた。

そして、男がどのような人生を歩んできたか。一瞬で理解した。

「うーん。思ったより詰まんなかったな。もういいや。」

シュン！！！

彼は、そう言い放ち男の首を斬りをとした。

「よいっしょつと。さて、町はこっちで良いのかな？」
彼は、子供を抱き抱えると町の方に歩き始めた。

彼と贈り物（後書き）

次回は、チヨツとした主人公設定を公開します。ネタバレになる事も躊躇なく書きますんで、ネタバレ嫌いな方などは、飛ばして読んでください。

ちなみに、主人公の性・名・字募集中です。

主人公設定

（主人公設定）

性：適当に名乗ります。

名：適当に名乗ります。

字：適当に名乗ります。

真名：真まこと

容姿

身長、177cm。体重、65kg。短髪黒髪。黒眼。顔は中の上。基本的に目は薄目で、興奮・感情の高ぶりで目が見開く。眼鏡をかけている。黒いシャツに黒いジーンズ黒いロングコート（夏でも着ている）。体は筋肉質だが無駄な筋肉は削ぎ落してあり、服を着ていると唯のひよろいあんちゃんにしか見えない。

性格

基本めんどくさがり。だが、自身が楽しむためには労力を厭わない。人格破綻者。異常者。欠損者。しかし、人間と虫以外には無償の愛情を注ぎこむ（動物を前にすると軽く発狂する）。また、礼儀作法やマナー・紳士的な対応を極力踏まえた行動をとる様に躡けられた。物事を客観的にしか見えないのをどうにか周りに合わせる為に、度々ボーとしてしまう。さり気無く料理も上手いが自身の作った物は総じて不味い物だと思っている。興味のある事は徹底的にやってみよう。自身に関係のある者が、不利益や危機に襲われると、我を忘れる事がある。興味の無いものにはとことん無頓着。また、姉や母親の教育（肉体言語での教育）で、次の事が出来なくなっていたり、

つい動いてしまう事がある。
女子供に暴力を振るう事。
女子供に暴言を吐く事。
女子供が困っていたら何をおいても助ける。
女子供は必ず守る事、など。

能力

世界移動

本来は異世界移動の能力だが、異世界移動は御爺さん（神）の許可が無いと出来ない。
しかし、認識によってその世界内なら空間移動や瞬間移動の様な事も出来る。

血液に付与（能力や特性等）

自身の血液に能力や特性・属性等と言ったものえお付与する能力。
また、能力の使用にはイメージが重要であり、基本的に知っている事、見た事のある事、理解出来ている事しか付与できない。
本来は体の急激な変化や負荷のため激痛が走るが、彼が二回目が付与した能力によって能力使用時に激痛は感じなくなった。
ちなみに次の様な能力を付与した。

皮膚が他人に裂けられた瞬間に血液が高硬度高質化。（基本デフォルト）

能力の使用時に負担変化に耐えられる様に肉体の変換。（基本デフォルト）

身体能力の向上。（基本デフォルト）

血液の制御。(基本デフォルト)
任意の相手に治癒効果を齎す。(オンオフ可能)
熱さ・寒さ・湿気などの環境に影響されない体。デフォルト
これからさらに増える予定です。

武器：赤蓮せきれん

全長：約90cm(別の武器の形を血にイメージして血を一滴垂らすと別の武器に変化する。)
重量：2〜3000kg(武器の重さをイメージして血を一滴垂らすと重量が増加減少する。)
幾ら人や動物を斬っても錆びない刃毀れしない。ダインスレイフという北欧神話に出てくる、魔剣をベースにしているためこの剣で付けられた傷は治らない。また、神の計らいで、次の様な様々な改造を施されている。
血を吸わせると、その血の所有者の今までの記憶(経験)を一瞬でこの剣の保持者に見せる(オンオフ可能)。
この剣で付けられた傷は治らない(オンオフ可能)。
見た目が日本刀。
刀身が赤黒い。
柄に蓮が描かれている。
その他。

おまけ

御爺さん（神）設定

名前：不明

容姿

身長、約180cm。体重、?kg。白髪。長髪。白いローブの様なものを着ている。90歳後半の容姿。だが、背筋はきちんと伸びている。

性格

のほほんとしている様で腹黒い事を考えている様だが、結局のところ何を考えているか解らない性格。

主人公設定（後書き）

後々追加していきます。

死体と料理と思考停止

「うわぁー……これはある意味絶景だな。」
時刻はもう日の昇る少し前。

彼は廃村の入り口にいた。壊された建物、焼け焦げた建物、所々に無雑作に飛び散っている血痕・肉片・死体の成れの果て。町の入り口には、目が抉れ壮絶な表情を浮かべ全ての指を斬り落とされ全身に矢を所々に射られ針達磨の様になった男の死体。見渡す限り残酷な行いが行われた事が手に取る様に解る、そんな村。

「うーん。どうしようかな？……っあ！……初めて人殺したんだ……もつと楽しんどけばよかったな。」

彼は、殺しという行為を娯楽の一つとしてしか考えていなかった。彼にとつて生きる、事態が娯楽としてしか感じられないのだ。

「とりあえず……あれでいいかな。」

彼は、欠損の少ない民家を見つけた。そして、家の中を調べ始めた。「運がいいな、寝屋は無事だ。よいしょっと。」

彼は、抱き抱えていた子供を寝具にゆつくりと寝かし、他の場所も調べるために部屋を出た。

「……死者にはそれなりの礼儀を持って接せ……か。」

彼はそう呟くと、肉片・死体の成れの果てを一人分かき集めては埋め墓石代わりに石を積むという作業を黙々と続ける。

……

・
・
・
・
・
・
・

日が天高く昇るほどの時間がたった。

「そろそろ、あの子起きるころかな？切り上げてとりあえず、食材確認するかな？」

彼はそう言くと、作業を中断し先程調べた時に見つけた宿屋の調理場に食料の確認に向かった。

・
・
・
・
・
・
・

「……作り過ぎたか？……まあ……いいかな？」
炒飯。野菜炒め。チンジャオロース。チャオチエツ。などがざつと
数えて十人以上の料理が厨房のテーブルに並んでいる。

(にしても、ここは何だ？水道、電気が無く、建物やあの男の“記憶”から考えるに中国圏の何所かだろう、時代は三国志辺りか？……駄目だ……情報が少なすぎる……他の可能性も考慮しないと……)

く

(しかし……御爺さんは何故私を此処に送ったのだろうか？……真偽は何所に……)
彼は物音に気付かず考え続ける。

く~~~~~!!!

「うん？」

彼は厨房の入り口から大きな音がした事に気付き、厨房の入り口に目をやる。其処には寝て居た筈の子供が厨房の入り口からじっと彼を見て居た。

「……」

死体と料理と思考停止（後書き）

感想意見などありましたら是非送って下さい。

死者の思いと魂からの叫び

「少し出てきます。食べてていいですから。」

「コケコケ!!」

彼は子供の反応を確かめてから厨房から出て行き、村人だった物の埋葬し始めるのだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・これは？」

黙々と作業し三時間程経った頃に彼は、一つの民家に入り死体が無いかどうか確認していた。

其処で彼は、少し違和感のある一つの死体を見付けた。

その死体は所々に刺傷・切傷・頭を踏み潰され脳髓を撒き散らし、臓物を脇腹から引き摺り出されたにも拘らず、蹲り手を守る様に息絶えた男性の死体。

「・・・見付けたく無かった・・・かな？」

息絶えた男性の手にはグシャグシャに握り潰され、自身の爪で自身の掌を貫き出血しているにも関わらず更に力強く握り締めていたと思われる物は、赤く紅く染まった一枚の紙切れだった。

其処には次の様に記されていた。

< 賊の本拠地は山中の崖の傍に有る砦で

す。

見ず知らずの貴方。

叶うならば、どうか妻と娘を救っ

>

最後の文は文字として読み解ける物ではなかった。

「如何しようかな？……………って、私に選択権は一つしか無いですよね。……………は？。」

彼は手紙をポケットに入れ厨房に向かった。

「すみません。少し用事が出来たので此处で待つて居てもらえますか？」

「……………」

「……………駄目ですか？」

「コク」

「うん……………では、帰って来たら御菓子を作って挙げます。そ「コクコク！！！！」……………物分かりのいい子は嫌いじゃないですよ。……………いい子。いい子。」

「コク」

彼はそう言つと子供の頭を撫でた。それに対して子供は一度頷いた。だが、外套を深く被っている為表情は解らないがとても嬉しそうで

照れている様な雰囲気醸し出していた。

(.....やばい.....子犬みたいで可愛い。尻尾が着いているのでは?.....っは!?...いけない。いけない。)

つい彼は子供に尻尾が付いていて激しく振っているのではないかと、真剣に考え始めそうになっていたがギリギリで我を取り戻した。「では、行ってきますね。いい子にしてくださいね。」

「コクコク」

そう言い彼は子供の方を見ずに厨房から出て太陽が傾き始めた山賊の砦がある森に向かった。

何故振り向かなかったのか?

それは、次に子犬のような姿を見たら彼が暴走(発狂)してしまうかも知れなかったから自重したのである。

(あれは。やばい。二連続で見たら.....この事は、考えないようにしよう。.....その方がいい。.....けど.....可愛かったな。.....今回の事は見なかった事が正しい!!.....でも.....見たかった.....。.....けれど、見たら自制できないかも知れないからこの選択は正しい!!!.....).....
.....けど、可愛かったな.....)

彼は山賊の砦までの道中ずっと、などとそんな事ばかりを考えていた。

「楽しいと可愛いは正義だあ——————!!!!!!!!!!」
「!」
何処からか、壮絶な魂の叫びの様な声が夕日に照らされる森に響いたという。

死者の思いと魂からの叫び（後書き）

この話では軽く元々壊れていた主人公が更に壊れてしまいました。

懇願と赫い赫き(前書き)

更新遅くなってすみません。

懇願と赫い赫き

「ここ……かな？」

西の空がほんの少し茜色にまだ染まっている昼と夜の境界。

そんな時間に彼は山賊の砦の城壁らしき所に辿り着いた。

彼は辺りを見渡し城壁沿いに灯りの灯っている場所を見付け近付いてみる事にした。

近付いてみると砦の門の様なものが見えてきた。そして彼はその傍らに門番らしき人物を一人見付けた。

「もし、門番さん。」

「ああ〜ん！……んだよ。ヒョロイあんちゃん、迷いでもしたのかい。」

通常の間人なら普通に在り得ないことなのだが、彼は極々普通に門番へ声をかける。賊の砦の門番は、一番初めは唐突の事で訝んでいたが、彼の事を見て唯の迷い人とでも思ったらしい。

「いえいえ、この辺りで楽しい事が出来ると小耳にはさんだので立ち寄ってみたのですが。もしここがそうなら、私も入れてはもらえませんか？」

彼は話し相手が違ければ上流階級の貴族が優雅に会話を楽しんでいく様にしか見えない優雅で自然な振る舞いで門番に問いかける。

「あんちゃんよ。良い耳してんじゃねえか。……よく見たら珍しい着物と剣持ってんな……それ、よこしたら考えてやるよ。」

彼の言葉に賊の砦の門番の男は、彼の事を遠慮なく頭から爪先まで品定めする様に眺めみる。

そして、厭らしい笑みを浮かべ彼に手荷物を寄越せと言ってきた。

「そうですか。解りました。」

彼は何事も無かった様に言い。左腰にさした赤蓮を鞘ごと腰から引き抜く。

「・・・ああ、忘れていました。」

だが彼は門番に芝居かがつて言った。

「まだ、なんかあんのかあ？」

門番が面倒そうに尋ねる。

「はい。良い物があるのですよ。」

彼は演技かかった様にと続ける。

「おおう！？なんだなんだ！？金目のもんか！？」

門番はテンションが上がったのか、目の色を変えて彼に尋ねる。

「ええ・・・とてもいい物ですよ。」

彼は変わらずに演技かかった様に、勿体ぶっている。

「勿体付けてないでさっさと教えるよ！！」

門番は堪え性が無いのか。彼に掴み掛るかの勢いで問いかける。

「はい。」

彼は先程までと違い人形の様に返答する。

「早くしろよ！！」

しかし門番は、テンションが上がり今まで焦れていたためか彼の様子の変化に気付かなかった。

「今見せますよ。」

(イメージ)

彼は能面の様な表情で、赤蓮を眼前に持って来て刃を少し抜き自身の左手の人指し指を少し切りつつイメージする。

「な、何やってんだ？」

門番は戸惑った様に、彼に問いかける。

「・・・」

しかし、彼は答えない。

代わりに何も持っていない左手を門番に向け振り抜く。

そして、彼の切り傷から血液が門番に向かって飛散する。

不自然な軌道をとって。

蹂躪と歓喜（前書き）

更新遅くなって申し訳ありません

家族旅行行ったり

行った先でウイルス性の風邪引いたり

母親に風邪うつして介抱したりと

忙しかったもので

本当に遅くなってしまつてすいませんでした

そんな砦の中一際大きな瓦壊音が響く。

全長が5 m程ある城門が6分割に切れかた崩れ積み重なっていた。

その傍らには彼がいた。

その手には刃が赤々鈍く輝く大脇差と小太刀が左右の手に握られていた。

「宴会中失礼。．．．いや、何でもないです。これから殺す相手には礼は必要だと教わって無いし。．．．ああ。安心してください。死んだら埋葬はするんで。安心して殺されてくださいね。」

「．．．．．殺せ！！！！」

砦にいた賊達は彼の異質な雰囲気呑まれ呆然としていた賊たちは、先程豪快に笑っていた男が叫ぶと一斉に彼に向かって襲い掛かった。

「やれやれ。盛んですね。でも、これだけの人がいれば楽しめるかもしれないね。」

彼は手に大脇差と小太刀を持ちながら呆れた様に言い、その後とても恍惚とした笑みを浮かべていた。

『ッ！！！！！！！！』

捕まっていた女性たちは子供を抱き締めこれから起きるであろう残酷な場面を見ない様に目を閉じる。そして、彼女達は耳には一方的

に切り刻まれる音。血が肉が臓物などが飛び散る音が響く。

『うわ〜。逃げる逃げる!!』

しかし、彼女達の耳には複数の男の悲鳴が聞こえる。

『・・・・・・?!?!?!?』

そして彼女達は恐る恐る目を開け見た物は、笑みを浮かべ一方的に蹂躪・虐殺をする彼の姿だった。

彼に正面から大振りで切りかかって来る賊、彼は右斜め前に大きく踏み込み大脇差ですれ違いざまに胸を真っ二つに、後ろから迫る賊の剣を持っている手の指を振り向きざまに左手に持っていた小太刀で斬り落としその勢いのまま右手の大脇差で首を刎ねる。

その際に、賊の血液が大量に彼に降り懸かるが彼は気にもしない。それどころか何所か嬉しそうな歡喜に満ちた表情を浮かべている。

蹂躪と歓喜（後書き）

誤字脱字あったら教えてください

練習と化物

辺り一面赤い世界。

辺り一面死体の世界。

生きている事が不自然に感じるほどの異質な空間。

彼が創りだした彼の世界。

彼は、最初にいた場所から数歩の位置にいて殆ど変りの無い姿で立っていた。

全身が賊の血液で染められている事と薄ら笑みを浮かべている事以外は。

そして賊は残り一人となっていた。

そう、賊達に指示を出していた男だけ。

「おめえ、良い腕持ってんな・・・どうだ、俺とくまねえか？」

賊の頭領は手下を皆殺しにされたとは思えない程楽しそうな笑みを浮かべ彼に問いかける。

「そうですね？・・・それも面白そうですね。けど、残念。私は女性や子供を悲しませる人と

は共には行けませんし。それに、貴方の役割は決まっていますから。

┌

彼は、一瞬考える素振をしてから淡々と述べた。

「へ、俺の役割ってえのは何なんだ。」

賊の頭領も彼の話に興味を持ったのか笑みを浮かべながら彼に問いかける。

「はい、殺しの練習台と“的”です。」

彼は相も変わらずに、淡々と述べる。

「うち!!糞が!!!!!!」

そう言い賊の頭領は唐突に斬りかかる。
彼は、全く焦らずに賊の頭領から距離を取る。

「さっきまでの威勢は如何した!!!!!!」

彼に攻撃を避けられた事が頭にきたのか賊の頭領は彼を怒鳴りつける。

「.....」

彼は、観察する様に賊の頭領を観察する様に見ながら左手に持つ小太刀を逆手に持ちかえる。

「何か言ったらどうだ!!!」

賊の頭領は彼に怒鳴り付けながら大振りに斬りかかる。

「単調で面白くないですね。貴方は。」

そう言いながら、賊の頭領の漸劇を彼は左手の小太刀で左に受け流し、そのままの勢いを殺さず右手の大脇差で賊の頭領の両手手首を斬り落とす。

「ぎゃー!!!」

大量の血液を手首から噴出させながら賊の頭領は奇声を発しつつ後ずさる。しかし彼は後ずさる賊の頭領の左足を大脇差で斬り落とし同時に右肩に小太刀を突き刺し壁まで押しつけ、その後大脇差を左腰に突き刺し壁に縫い付ける同様に右肩に刺していた小太刀を壁に縫い付ける為賊の頭領の右肩を貫通させ、壁に縫い付ける。

「 ツ！！！！！！！」

賊の頭領は声にならない悲鳴を上げている。

「これでよしと。先ずは……これでいいかな？」

彼は賊の頭領を気にも留めずに辺りを物色し、弓と弓矢を見付けそれを手に取る。

ズサ！！

そして、礫になった賊の頭領を的にして矢を射る。

「流石に知識だけだと最初から上手くはいかないですね。」

そう言い彼は、外れた事を気にせず矢を射続ける。

「うぐ！……てめえ……な、何する気だ……。」

「そろそろ、他の事もやりますか。」

数分後、彼は7発中6発当たる様になり彼は弓と矢を捨てる。

「他には……これ久しぶりにやってみますか。」

彼は近くに有る死体の懐から小刀を数本取り出して的となる男に向かって小刀を投擲する。

ドス!!

彼が投げた一本の小刀は賊の頭領の顔面擦れ擦れの壁に刺さる。

「鈍って無いな。じゃあ!!!!」

ドツドツドツドツドス!!!!!!!!!!!!!!

「ッ …… !!!!!」

「連続では上手くいかないですね。」

彼は小刀を八本指に挟んで連続投擲した。そのうちの二本が彼の思惑を外れ賊の頭領の左脇腹と右腕に刺さる。賊の頭領は痛み言葉にならない悲鳴を絶叫を上げる。

「まあ、もういいかな。」

彼は賊の頭領の悲鳴を気にもかけずにそう言う。

「う……………これで……………見逃して……………くれる……………のか……………?」

彼の言葉を聞き息も絶え絶えになりながら、賊の頭領は希望を見出して言う。

「……何言っているのですか？」

「……な……に……？」

「もういいというのは、練習はこの位でいいかなという意味で貴方を殺さないわけが無いでしょう。」

「な!？」

「さようなら。」

ドス!!

彼は別れを述べると呆然としている盗賊の頭領の眉間に一本の小刀を投擲した。

そして、居住まいを整え鎖に繋がれた女子供の方へ歩みを進めた。

「助けて」

「命だけは」

「子供達だけでも」

「化物」

女子供はそれぞれ様々な反応を示す。

ある者は助けを求め、ある者は助命を懇願し、ある者は子供達を庇いたて、ある者は彼を見て化物と罵る。

「……………」

彼は女性達の反応を無視して近付き赤蓮を振り上げる。

『っひー!』

ガツキン!!!

女子供は総じて目を強く瞑り近くにいる者を強く抱きしめる。

しかし、聞こえて来たのは肉の裂ける音・血の噴き出す音ではなく、甲高い金属音だった。

女子供を捕えていた鎖を両断した音だった。

『……………?』

女子供は何が起きたのか理解が追いつかず呆然としている。

「……いやまあ、怪しいものですが、たいした物ではありませんですから。そんなに脅えないでもらいたいのですが。こんな格好していては脅えるのも解りますがね。」

「……ありがとうございます。」

一人の女性が脅えつつも立ち上がり彼にお礼を述べる。

「そうそう、この手紙の書き手の奥さんとお子さんはいますか？」

そう言い彼は懐から手紙を取り出し立ち上がって来た女性に手紙を渡す。

「……これは……夫の……字です。」

女性は涙を堪えつつも彼に述べる。

「そうですか、旦那さんは立派でしたよ。そうそう、先に村に戻っておいて下さい。それと、すいません。食材勝手に使わせてもらいました、一人子供が食べてますが皆さんも一緒に食べて下さってい

いので、元々貴方がたの食材ですしね。では。」

彼はあくまで事務的にそう言い女子供の前から立ち去る。

『・・・化物』

彼が立ち去った中数人の女子供はポツリとそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419z/>

グリード（仮）

2012年1月3日02時52分発行